



志加文庫



佐鳥羽院門口傳

大和音を詠むるより昔より今あるまで
人のいざりにもあらうとあらうたるも
むすもくべて唯人性とのてんせうとあつて
風情の妙底をあくまへあらわすと善画
このよちす進退とけすとけす比中
姿もしくうへ一渦とゆきりかへ或そ
うれりくへけるもあらや或ひやうえ
艶ぢあり或ひ風情とむひすばり或
き姿めぞくひるゝれふうりくはのま

才則詞藻也。要を尋ね又古あらばは
今初めれ人の多くは略してその至要ばかり
はよ七ヶ條あり但人へうるゝ斟酌を
まつゆ也

一和詩学問へて種々に詮議もまとひ
才學と云ふ事は今アリテ才學也
モハモハ万葉集ソウラクをやうに名前で
そくアラシはのと併し用其ノモノ以
きの人の萬葉集れ詞とくく詠
ひがすばえよまなむりうれハ無下の事

モハモハ文字代アリトと云ふ
アリタニ一反今アリモ問てモハモハアリ古
今集アリモアリハアリトヨリ事
行ともエヌ多々くの奇ともはくアリての
きわむり必有ホモアリ

一通とこのひよむすれハアリトモアリ
モハモハ指燭一束ナニ術一時三百首成
徳故中古三年練習ノモアリハムケ
モハモハ百首成術て詠早めれも
又アリ失く或ハ無題或キ詠早めれも

うへ説きまつたいふを終て竟あり人
多きは一くよどとぞれの辛介の用事
あらひく窮竟窮竟ノアリムアリ根之
寺ハ十廿首おもてて多く三脚きと百
度こゝれをあれとも云ひ小をか送恨の事
一書のじかかと小万葉集のうわりハ百首
うちよハ萬葉集の詞うわき源氏おれの
ううりするはき又其様よぢるがよく
うえん保くア讀也

一萬葉の上手がのせト何く稱

とまれりやうくられ中にうくま御
やくアリくちじ半ちうした寺ノ子
まわゆくへ用さあく

一時うかりて影を諭アシテまかうり也
代行アリうりよ入るく結題比寺
ノモロコシのふそとあまれども多
きもててゐたまくまく季經百具
ふしきぢて卒サツ金キムタタ頗タタこれも
寐蓮スイレンのむすにふ請タチくとく無題
比寺を結題の方とまつだま一樣

浴めりとよきを其謂あまくし
 寂連はとて結題をとくとくひ
 定家を題のゆきりともうそりえ
 まよによらへ近代初ひつまれまくの
 いとく謂おふより結題をとくとく
 思入る題れ中と深もれ、ととぬもろ
 うからす時くよみぢへきり故中
 清門校政の結題に題號もねじ
 まこととてやまかの池水半水

題立て

池水半水にあられむとけく
 有氣もあらほくとけく
 やうゆれもくもすくとけく
 まとも題のムをとくとけく

與もあら半水とけく

一詩合の字とくとくせよもよとけく
 とくとく釋門寂連がとくとくの核
 とくとく題の又とくとくおとくとく病
 おとく又深底あれ物語の行れくとく

らへ相手とあきかへ
き
まくわ經の手札をもん百首の手
札をもとめても近代の其の
もの

一
あ廢れ余の生を歎ておそれも慰每
子御とおもよ事と御きや
出くらで棄まれんのさうそよにせ
れと一處よりとほりうじと棄もれ
きくわふつきはも下ちびく廢道
もくもくもくのとれの事おほれも

是が省略とれ行ひもとの面だとく行
あ一枚あいとくのとく
あす但山よせんしゆん中にあいがた
一或い手としサカのとて大納言經
信とて受けもありうれりくて然も
いぐれに内又後れ堪能のとくす
すと二枚りうちうらちとくやうとき
接もとふだねくとくとくとくを
えみだすとく接も姿もうりげ一樣
則定家はり度哉もうすこせ

うかでけんぐくあらきの山むらへ
ちきくれといひのゆゑあり

二毛み、毛り又

う体なくまわ入はれを風景
たれりなづか秋去ゆくれ

うかつよ姿也散土門内府亭も
新供のあやしに釋門あれども行
やすくは出さがつと申す道を施し
まつりゆきけりうて経題が文主
さげみ家中れよりよされ景と高せ

てえい凡情とありうれもあれとアミ
スくくらきときぢばへておほくの秀行
せよみだり後れうなえ釋河西行後東
ちらもくじこにあらん神ちり釋門ハヤ
あくましよひもくられぬ可いう
き群小愚子に庶幾をはするを西
おとづれてあるとこゆふはくられ
ぢありかく出處へて見ひてく
相無くみ生得れ行人とわねゆく
よりくわほれき人れまほいぢやす

さすりあらひ不可説れよもむき清潤
をさざめくも魚もすにうらは
ま車もみむ

さくすれすれのぞきもくもく
くじにあらは水のれいと
あれ神身り俊惠は仰せんに松立
立尺れちや先草よ水の多ひやうに繁
きよひつとよひ

さくすれ山の多ひゆうてちよまく
くじに麻のうくわらう歌

釋門優ぢるすにけよとよき迎春
とくくは大放門門前教院故中門門務
改古水大僧正あら殊勝く東院をと
ゑみくとも極りよられき故折改ハシ
おひのくて法方とゑりきよくせ
みゆ生年幼のなよすとよーふくさ
主事恩儀ちら百首をのみほくとせう
とくくとくくとくくとくくとくくとくく
りくわーあすうアヤサセとせう
とくくとくくとくくとくくとくくとくく

西行すりありとれどもいすハソレ乃
上も下もとくへも林とく一木桺と
えまきにまつたまうむわくのよ
あすけり

やうれ本れ系ニ神山をめぐ
称うつをあくやみう
れ神ありとれどもよつてはるく
あみの中小宮よれわくしわけり

あきはに 流くまく

雲ふあくま
秋り人の神

松を時々の

をれむ秋

かほくぢに おきたちさと 玉れ水
朱兵
此外だほりき又寂蓮定家或降雅經
秀能あり寂蓮ハおぼそりあくらう
しめくらあくらと葉／＼くら／＼根
木をちくをつづくくら／＼ちく／＼木
／＼く／＼木をつづくくら／＼く／＼木
うか白むと三種ノテよまく／＼根
うらうらこせむてつき／＼木とおよき欲
れむねすまても小ちがすけ少々
根行／＼木／＼木の其實は能よき

まことに、うみをくわう所で、よむすよ、
のじるねもあり、あらわすは、近年家事
無下入すれど、やうとせしゆ
女房うとうとハ母はやうときうわく、

朱点
おれまよふね風 朱点
浦 えぬハあくめ
のほりをまひに 朱点
おれまよふね風 朱点
木紫くとて
まゆのと紫
のほりをまひに

故に改へよくと行きうへ作らま
ゆべ考へはうさらりとせうへまく
トされ、定家のたあむよのありやへ
殊勝あそべ入る波月ふすらまくと
れひじくはまて餘人のたうだう
アレサクシヤキミを學みくとらばす
みみねるすこまくにありひくみのな
達一たかきと殊勝あそびすゑた
分景氣ゆききめりき但引級れぬ
ぢりわれハ鹿とみて馬とみてかく傍若

人よりし過すりま他ん志洞とま
及んで考へて波月すゑみかの起一ま
トあにうち折とくらとよくかくも
のよどくとく可ちとくとく我すゑと
も自讀詩うあくわくとよくせまつと
腰立れ身みりと年太肩のまづま
ひくの志の面影と身ゆく思てる柔
のとくとくて男とも手つてゆづる
定家なほ中將とて御へても
やがくり幸よせり花のうき

ありの事多きよりされどよ

右也次將にて廿年よりひき本懐の
もやすとくもとを一とくとくと帝代の
勝手をくわらぶも自讃をくまうすや
そくもともせも必ず乃善悪よりへと
かくもやふとくせんほくとくすり
テとくは自讃すとくを家うちうと
も一日有り恐のちこれよとよ度の
花火子のく中門に移ぬのとくとく
きりふふうれぬくとくやがりとく

近キタキルハあがむに行れソトキミ
てはあらにかく新古今ニヤアラシニ
りの撰集れよ行ふは是詮ぢりとく文
自贊一とくれりとく文情りき若ちりと
れをまいかれテソニテソノリとく
異様ノトキルハとくとくとくとくとく
勅機うき給ひほんのまくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

絶事へあらよちかへあり竜勝四天王院の
名所の障子は清すと生田れども入と
やく所へすてあるなりうちの割棟れ
已言うりくいきのき、放送とくま
ゆゑに清濁を弁ひの遺恨あれし代々
勅撰取てばさうかくもうめもくしも人
のうけ不うかくはなれし傍書於
能清をねずやへちる物て放錦うの
もく、殊勝のものあれともうまくほ
れ情よもあらんと候ぢくと廣義をす

まくはもれえしにやさんとせゆや
まが同其骨すれども初められまのう
正裕が一車よむとて、空家へまわれ
上ひ下て、もとからふともれ、うかく
をそじてまわれ殊勝のそれもくも
はあれ

秋とてすくちる風すまうは
つづたるもれあひもく草
ぬとて秋とてとう化ちだすふくらむ
あひ風ふまうとてまく御作まく房

ノ下至りてさけら下に匂ふ下あひゆと
優ちばすれ本種とくらかの障子れ生
田れ森のすよいまことにまぢて三印
むもくハあれとも此乃夫端自他にま
そくらきよすぢうそれとて其身
やにありゆるよりあへんこの行を
さくみかねく羽のやさしくえし
はやからをせまけじつまく其事に
森の下にまづ一かれが重れあるよま
かハ景氣りやまとおもむきれまづいは

あれとくわき入りてだくべくわぢれ
葉内もくぬあぢやの秋れすとくなふと
も多々同様はうあすと人れまくらう
むくらうとくらうあくらうとくらう
不文あら移門ありをもく寂よれ
秀テハ羽い優よやうとくらうとくらう
いもれもくらうとくらうとくらうとく
毛頭家なりとくらうとくらうとくらう
同一もくに彼はう我はうとくらうとくらう
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

後事より多くて人手足りぬありす
と云ふ事より書を撰集小入く
故代子しも内へすハ辛にくじきを
あれどもひ止まつても内へうすす
らべ

に治元年十二月八日於大原山西
林院普賢堂以教会上人可持御宸
筆本書写之早頗有由其清草本之外他不著子細雖是筆端由來尤可為殊
寶也

件乃教会上人ハ彼院ニ遣可まづ付まひせぐ
ハまづの内時々してはなづくとくやりすれ物とよれ
やまづ捨てられきる中にあづからむくまで一卷を
乃書之

貞和六年二月朔日栗田口寧宿坊
玄写之此年双禁花園上人奉乞留

之如法勝寺六僧坊炎上時全燒失
仍重而寫之

寃正六年十月廿四日

右近太史卒

十四終

あらんがやハ、いやうゆもむじへきのそ
ごとくきて侍へるまうりはあらぬ
ほりよどひ日本よりとおつせゆ
まゝ舟をわたくちと御へて行かる
だの角をきてあらぬまのとがり
やまくらのすらあられてゆくやまとよ
かくかくとまほくあらんへとくされ
しりへりあらんへとくされ
とくはくとくまほくあらんへとくされ
絶情妙意の神とまほくあらんへとくされ

卷之三

希哥式 C.

まうとくをうながすと、年々アリのする
不行もしくは一せうりんからぬに
ありて、かくとゆづれとなむをやくも
ゆくさんやうにせらへのめりひえくろ
風情二十字よりほほえんとくふくわ
あそびりとて、いはゆるのゆじもくと
とこれよしりとすゑのうへをとくと
黒の花の陰をさり高人の鮮衣をかけ
あつて、それととたぬ言経行後村翁
に在京主ひ取捕の清瀬館うちへて又足

おのづらは道とすひづらは、暮後
とすらうへこのとするすゑのや
すは御よりほくのむひつまでもう
とれどもひき世とらへじひ
る者とん今乃せよがりてはつやしと
ちをいそがへくとくとくとくとく
おあらへぬまづら花山信正在原中將
怪小町のひめくらすの三段もつて
凡てゆるに付候也

六
外
上

鳥かくすとすそをうへらひつ、うす
もやうさうへるいわくわくとすくせ
とくゆうもとくえをうきりあらう
今うひゆうひゆううひうりをく
うやうがうりううゆううとくううあ
ううううううううううううううう
ひて寛平以降の手書きり、そのたと
ううううううううううううううう
うねううううううううううううう
ううううううううううううううう

こやうりかのやうと
九ひ七五のまとさかくとくと
せかくとくとくとくとくとくと
かそれぬこうとくとくとくとくとく

いのうのうとくとくとくとく
はくとくとくとくとくとくとく
くのうのうとくとくとくとくとく

物をうそと

とくのうちへまよひ

袖をぢりじとひ

月やあくまほやび

さくらちみ本ひ

りとしとととととと

つと今をとととととと

うとせよかととととと

うとよゆくととととと

うとみゆくととととと

わきとととととととと
うのとととととととと
竹といふや難解とととと
きひとととととととと
日ととととととととと
かうとととととととと
てあくととととととと
いとととととととと

大納言經行

多きれの門田の徳美がすくすくと
おののまうやうやうあさこつをまく
あらわ代の代のそとそとうふれめや
ゑすすき川のとまんうらひへ
神はそとまよううがまくのれ
ねりうえをあく

後醍醐天皇

ふくろうそくそくらうひくろう
やせよみゆる曉乃一系

六甲山房上
だら勝は八十うら川のとやまく
黒こすりけむのとせのうすうと
れいもとのとせのとせのとせと
よきや
うすくゆくへにひく風ノリ
尾花すくとあるあらのゆふくれ
かふとくらむもみくまくうす
れいとくとくあれとく
うれいとくとくあれとく

あすまうん身のむけとて
えむるは月やひりよ
物ひまめあつじもふらの
まきまきくわくとくまと
れりかくをなめりよひ

あくとも

うづけるくをうとのへぢうよ
うきまくわいわくわよのば
うつむきのまくまくまく
駄はくまくまくまくまく

まくはまくはまくはまくは
まくはまくはまくはまくは

駄浦

うきやくはくはくはくは
まくはまくはまくはまくは
まくはまくはまくはまくは
まくはまくはまくはまくは
まくはまくはまくはまくは
まくはまくはまくはまくは

清江集

そひのまへくま代裏のく
ゆく月のけのやり、
ゑすはやかんのそせ
みをよしにこやくおと
難波くまくわひのちこ
くまかめりうき
がくくはうのばや一おもてん
くこせといひむ

卷之二

あくしゆのつゝの深林ゆりあきて
ゆきかくよかくふ月れ
ちまうとまへもやうもと命うそ
もれとくの秋とひみを

先人

まやみかのやくもくちり
花乃宮ちひるをあそはる
せのゆよなとあけに入り
ひのゆふと麻うぢくひら
すみわらてぬとくはきぬまつ

六
卷之三

義元之比自征夷將軍依先人所注
送之秘本也

弘長二年九月老後史書寫之

三代撰者衆門融覺判在

竹祖父入道大納言自筆本令書寫迄
最可為證本矣

參議藤原秀

主判

